
「令和2年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

1

出島 博昭（秋田県）

2

有限会社豊心ファーム（代表取締役 境谷 一智）（青森県）

3

農事組合法人ふながわ（代表者 由井 久也）（富山県）

4

浅井 孝司（北海道）

5

高橋 俊恵（青森県）

6

五十嵐 光博（山形県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

7

農事組合法人伏古生産組合（代表理事 柴田 隆）（北海道）

8

遠目塚 春生（宮崎県）

9

伊藤 裕彦（北海道）

10

天水 茂（北海道）

11

カンドーファーム株式会社（代表取締役 田尻 一輝）（島根県）

12

柿並 博志（宮崎県）

1 いでしま ひろあき 出島 博昭 (秋田県大館市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約1.8ha	874kg/10a	302kg/10a(572kg/10a) ※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻)
- 米を中心とした複合経営
- JAの栽培実証圃の担当者として、栽培管理の情報等を地域に発信し、地域全体の技術力向上・産地形成に貢献

【作付品目】

- ・主食用米:あきたこまち 等 4.1ha
- ・飼料用米:秋田63号 1.8ha
- ・野菜:アスパラガス 等 0.5ha



【取組のきっかけ】

- 国産飼料提供による比内地鶏のブランド力向上への寄与や、経営の安定化が図られることを期待して、平成21年産から飼料用米生産に取り組む。
- 品種については、地元JAからの勧めもあり、耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、地域での栽培に適するという特性を踏まえ、「秋田63号」を選定。



【取組概要】

- JAが運営する展示ほ場及び営農指導員から得た情報を参考に、土壌改良材を投入し土づくりを実施、基肥として鶏ふん 105kg/10a + N5.6kg/10a、側条施肥でN3.6kg/10a、追肥は2回でN2.8kg/10aを施肥することで収量を確保している。
- コンバインを地域の農業者4人でシェアリングし、機械コストの低減、省力化生産に取り組んでいる。
- 主食用米はJA施設、飼料用米は自己保有施設で他品種の乾燥・調製後に行うことで、コンタミの防止に努めている。
- 作業競合が生じないように、主食用米(早生品種)と飼料用米(晩生品種)の作業分散を実施。その際、晩生品種である飼料用米を先に播種・育苗・移植し最後に刈り取ることにより、多収に必要な生育期間の確保に努めている。
- JAからの依頼により自身のほ場を「秋田63号」展示ほ場として協力し、地域の飼料用米栽培の普及に貢献している。
- 出荷した飼料用米は、JAの比内地鶏生産部会の会員へ供給され、「比内地鶏」の生産振興に貢献している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
みなゆたか、えみゆたか	約39.5ha	803kg/10a	130kg/10a(674kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 代表、専務及び通年雇用職員5人
- 米を中心とした複合経営
- 大豆との輪作体系や乾田直播でコスト低減し、追肥の徹底により収量確保

【作付品目】

- 主食用米: まっしぐら 等 15.4ha
- 飼料用米:
みなゆたか、えみゆたか 39.5ha
- 大豆 30.8ha

【取組のきっかけ】

- 畜産物の飼料を国産化することで、食料自給率の向上や食の安全・安心に貢献できる取組に共感するとともに、耕畜連携による稲わら・堆肥利用も含め平成27年産から飼料用米に取り組む。また、乾田直播や立毛乾燥等による作業分散やコスト低減の取組を導入しながら経営面積拡大と通年雇用を実現できることも期待。

【取組概要】

- 強い耐寒性をもつ多収品種「みなゆたか」を主力に作付けし、令和2年産から「えみゆたか」も加え、安定した収量を確保。
- 乾田直播はV溝播種を7ha取り組み、残りの32haは移植栽培で、田植え期間が長いため、分けつ期までの生育期間がある作付初期段階では50株/坪で植え、中盤以降から60株/坪に変えて栽培を行い、高い収量を目指しつつコスト低減している。
- 施肥については、乾田直播は一発肥料を使い窒素成分で16kg/10a施肥。移植栽培は慣行の化成肥料を使用し、追肥を3回に分け、葉色を見て窒素成分で10a当たり、出穂前5kg、手直し2kg、穂肥2kgを手散布。肥料はフレコン購入でコスト低減。
- 耕畜連携の相手畜産業者から、堆肥を格安で購入し稲、大豆に散布。大豆と輪作で、大豆の後作ほ場は肥料代を低減。
- 飼料用米の収穫は、主食用米終了後に、ほ場で立毛乾燥させ水分20%以下で収穫することで、乾燥コストを低減している。
- 作業受託した水稻、大豆、大麦、小麦、無人ヘリ防除、稲わら収集作業に労働力を分散することにより、通年雇用及びコスト低減を実現している。
- 地域の農業者と連携し、実需者と意見交換を毎年行い、主食用米も含め契約を持続している。



青森県

五所川原市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約4.7ha	832kg/10a	277kg/10a(555kg/10a) [※]

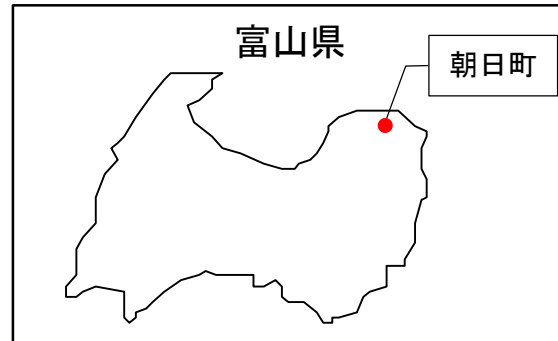
※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 地域の若い担い手の問題提起を機会として設立された集落営農組織から始まり、平成19年に法人化して発足
- 代表者: 由井 久也 (よしい ひさなり)
- 組合員[R2]: 32名

【作付品目】

- 主食用米:
コシヒカリ、富富富、てんたかく 35.5ha
- 飼料用米: やまだわら 4.7ha
- 大豆: えんれいのそら 9.8ha



【取組のきっかけ】

- 平成27年に大区画ほ場整備(一筆1ha区画)をした際、飼料用米の作付を勧められ、「やまだわら」の作付を開始。倒伏しにくいことや作期分散が図れることが確認できたことから、種子生産体制の拡充にあわせて徐々に作付面積を拡大している。

【取組概要】

- 土づくりを基本とし、ケイカルにリン酸、カリを加えた配合肥料(120kg/10a)、鶏ふん(200kg/10a)を散布。また、コンポキヤスタ(肥料散布機)を導入して散布を効率化している。
- ①主食用米の移植栽培、②主食用米の直播栽培、③飼料用米の順で収穫できるように作付し、作期分散。併せて、ほ場の水管理を徹底し、高単収を確保している。
- 飼料用米のほ場を固定することと、機械の清掃を徹底することで、主食用米への混入を防止している。
- 大区画ほ場の整備と、飼料用米の団地化による効率化に加え、大区画ほ場に適した畦畔の傾斜が緩やかな耕作道(低段差緩傾斜耕作道)を整備することで、大型機械の乗り入れやターンを容易にし、更なる効率化を実現している。
- 除草剤は、投げ込み式の大規模農家用製品を使用し、コストを低減。また、畦畔には芝を植えて畦畔除草の労力を軽減。
- 平成29年からスマート農業の取組を開始。センサー搭載コンバインを活用し、翌年のほ場毎の栽培管理に活用している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
きたげんき	約3.0ha	839kg/10a	254kg/10a(585kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子)
- 飼料用米の他、大豆、春小麦、秋小麦、なたねを作付けする複合経営
- 作業競合が生じないよう、輪作作物を計画的に導入

【作付品目】

○ 飼料用米:きたげんき	3.0ha
○ 大豆:ユキホマレ	3.5ha
○ 春小麦:春よ恋	1.9ha
○ 秋小麦:きたほなみ	6.1ha
○ なたね:キザキノナタネ	3.4ha

【取組のきっかけ】

- 地元JAからの勧めもあり、平成27年産から多収品種「たちじょうぶ」で飼料用米の生産を開始。現在は、より収量が得られる「きたげんき」を作付け。

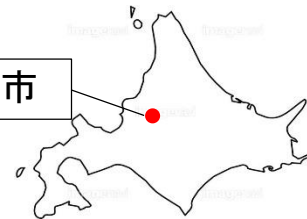
【取組概要】

- 極晩生品種の「たちじょうぶ」では収量が伸び悩んだことから、平成30年産から、多収で耐倒伏性・穂ばらみ期耐冷性に強く、出穂期はやや早、成熟期はやや遅であるが極端に収穫期が遅れない「きたげんき」を選定。それにより登熟が早まり、黄化率が85～90%以上で刈り取りができるようになり、収量も向上している。
- 栽培計画立案時から収穫までの期間、JAから生産者へ約20回程度「営農情報」が提供され参考としている。
- 育苗においては、置床鎮圧を導入したことで苗取り作業の省力化を実現し、また置床と育苗箱間に隙間が出来ず、生育ムラがなく、根巻きも良好な健苗育成を可能とした。栽植密度を慣行23～24株/m²から19～20株/m²に減らし(育苗箱数減)、生産コストの低減と省力化に努めている。
- 施肥については、基肥にN9.6kg/10a、側条施肥にN4kg/10aを施用。また、側条施肥に高窒素肥料を用いる(以前よりN1.2kg/10a増)ことや、育苗時に発根促進剤を施用することで、移植後の初期生育を促進させている。
- 収穫から乾燥・調製までを中村共同施設利用組合(中村RC)で共同で行うことにより、コスト低減を実現している。その際、飼料用米と主食用米のコンタミ防止のため作業期間をずらし、貯蔵タンクを分けて作業を実施するなどの工夫を行っている。



北海道

美唄市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
みなゆたか	約7.9ha	827kg/10a	154kg/10a(674kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族(本人、妻、息子)、雇用1名、繁忙期に臨時雇用あり
- 無人ヘリによる追肥で省力化を図るとともに、額縁追肥で畦畔付近の成長しやすい株を太く育て収量増を図る

【作付品目】

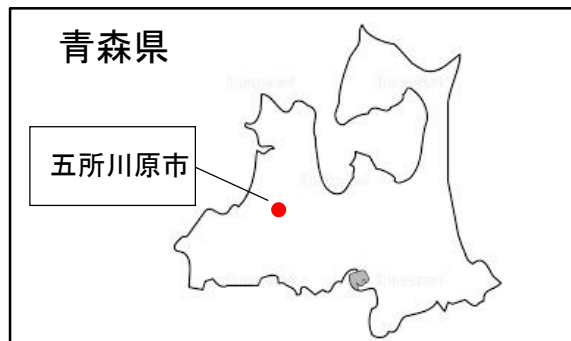
- 主食用米: まっしぐら 7.7ha
- 飼料用米: みなゆたか、まっしぐら 9.6ha

【取組のきっかけ】

- 水田農業の経営発展と次世代への継承に向けて、作期分散による農業機械の効率的運用による規模拡大や経営の安定化が図られることを期待し、平成27年産から多収品種「みなゆたか」で飼料用米生産に取り組む。

【取組概要】

- 耐寒性に優れ、地域の栽培に適している多収品種「みなゆたか」を移植栽培で作付け、収量を確保している。
- 育苗中に2回液肥で追肥を行い、2回目は田植え3日前に施し移植後の活着を促進。一部プール育苗を行い省力化を図っている。
- 施肥については、基肥として一発型の成分30-9-7肥料を用いて窒素成分12kg/10aを施肥。追肥はNK15を用いて窒素成分1kg/10aを稲の状況に応じてピンポイントに調整しながら無人ヘリで散布し、ほ場の畦畔付近には手散布で額縁追肥を行い、太い株に育て収量アップを図っている。
- 田植えは、先に飼料用米の作業を行い、次いで主食用米を行い、多収に必要な生育期間の確保及び作業の分散をしている。また、飼料用米の収穫は、主食用米の収穫が終了してから作業することで、ほ場で立毛乾燥を行い乾燥経費低減を図っている。
- 実需者へフレコン出荷することで、包装容器代及び運搬経費の低減を図っている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	約4.1ha	807kg/10a	179kg/10a(631kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、父母)
- 米を中心とした多品目(主食用米5品種、飼料用米、加工用米、大豆、野菜)栽培でソーラーシェアリング(わらび)を導入するなど新技術にも挑戦

【作付品目】

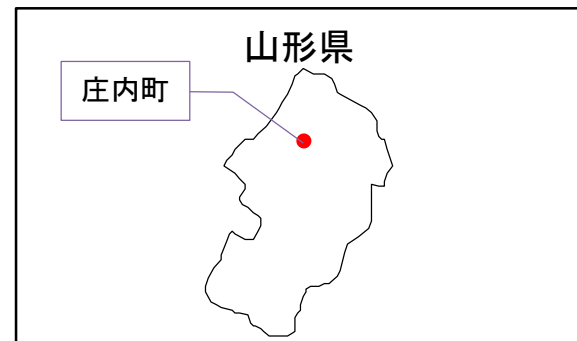
- 主食用米: つや姫など5品種 10.4 ha
- 加工用米: はえぬき 0.2 ha
- 飼料用米: ふくひびき 4.1 ha
- 大豆: 里のほほえみ 1.9 ha
- 野菜(なす、ピーマン、トマト等) 0.1 ha

【取組のきっかけ】

- 実需者(仲介業者)の技術指導(施肥・除草等)を受け、経営安定に向けた増収を図れることや、作業分散及び大豆との輪作による施肥量の低減等が図れることから、平成29年産から飼料用米に取り組む。

【取組概要】

- 平成29年産から、多収性で耐倒伏性が高く、他の品種と比べて茎が太くなくコンバインも傷まない「ふくひびき」を選定。
- 生産コスト低減のため、施肥は収穫後に稲わらをすき込み石灰窒素を投入して腐熟促進を図り、基肥は高度化成肥料(14-14-14)40kg/10a、追肥は尿素5kg/10aを2回実施し、大豆との輪作により施肥量を低減している。種子は温湯消毒、育苗はスプリンクラー散水、田植え時には、軽量培土を用いた苗箱で苗箱運搬機を使用し、除草体系は、初中期一発剤を用いるなど省力化を図っている。また、出荷はフレコンを使用し、作業効率を高めている。
- 実需者(仲介業者)の(株)野川ファームとは、安定供給に向けて複数年契約を行っており、(株)野川ファーム主催の講習会に参加し、生産技術等のみならず、交付金制度に関する意見交換を行っている。
- 農業の新たなビジネスモデルとして、ソーラーシェアリング(作物:わらび)を導入し、今後は、他作物への展開も模索している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
そらゆたか	約7.4ha	856kg/10a	283kg/10a(573kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 昭和56年設立
- 構成員5名・従業員13名
- 組合員の高齢化・担い手不足等の理由から農地集積を進め、土地利用型農業により規模拡大
- 現在では野菜ハウスにも取り組む

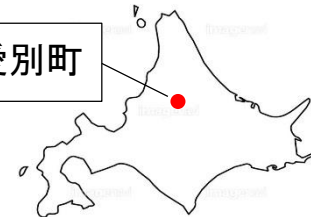
【作付品目】

- | | | | |
|--------------------|--------|------|--------|
| ○主食用米:ななつぼし、ゆめぴりか等 | 76.7ha | | |
| ○飼料用米:そらゆたか | 7.4ha | | |
| ○大豆 | 2.3ha | ○牧草 | 3.5ha |
| ○麦 | 1.6ha | ○その他 | 10.0ha |
| ○ハウス野菜他 | 2.4ha | | |



北海道

愛別町



【取組のきっかけ】

- 平成18年から需要に応じた生産のため、町内で飼料用米(WCS)に取り組んでいた生産者の指導により、主食用米から飼料用米へ転換。

【取組概要】

- 北海道の気候に適しており、多収性もある知事特認品種「そらゆたか」を作付。
- 生産面の取組としては、育苗ハウスの温度管理のための育苗ハウスの開閉を自動巻き上げ機導入による自動化や、GPS付きのトラクターの導入、スマホを活用した圃場の水管理など、スマート農業導入による省力化。さらに、地域で開催される栽培講習会にも積極的に参加し栽培技術向上に取り組んでいる。
- 経営面の取組としては、融雪剤や肥料の早期自己引取によりコスト低減を図り、複数年契約を結ぶことによって安定供給に取り組んでいる。また平成30年からは、グローバルGAP『コンバイン部門(水稻)』に取り組んでいる。
- 畜産農家と協力し、粳穀の使用や牧草の販売、堆肥の購入等で耕畜連携に取り組んでいる。
- 当地域で生産した飼料用米を給与した畜産物(鶏、鶏卵、豚、牛)をブランド化して販売する等、集荷業者や実需と連携することで、より安定した生産・経営を行っている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	約1.1ha	723kg/10a	210kg/10a(513kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、父)
- 土地利用型作物のほか、里芋などを栽培
- 近隣の畜産農家との耕畜連携を進め、堆肥利用による経費節減と収量増加による飼料用米の安定供給を図る

【作付品目】

- 主食用米:ヒノヒカリ 10.4ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 1.1ha
- 大豆 1.1ha
- 麦 1.4ha
- そば 0.9ha

【取組のきっかけ】

- 主食用米の需要が減少する中、市内の米集荷業者から養豚向けに飼料用米の要望があり、自らが生産した飼料用米が地域の農畜産物(豚肉)のブランド化に協力できればと思い、平成26年産から飼料用米生産に取り組む。

【取組概要】

- 土づくりとして、毎年、畜産農家から完熟堆肥(牛ふん堆肥)を購入し、2.0t/10a施用するとともに、元肥、追肥を適正に行い、収量向上に努めている。土づくりの継続により、年々飼料用米の収量増加につながっている。
- 毎年開催される飼料用米の栽培講習会に参加し、他の生産者との意見交換等を行い、収量及び品質の向上を図っている。また、JA稲作振興会の地区役員として、他の生産者への啓発を行っている。
- 畜産農家、飼料業者等で構成される「えびのエコフィード利用・増産推進協議会」のメンバーである米集荷業者より、畜産農家のニーズを把握するとともに、ニーズに応じた飼料用米の安定供給に努めている。
- 生産した飼料用米は、出荷先の米集荷業者を通じて「えびのエコフィード利用・増産推進協議会」に参画する養豚農家に供給されている。この地元産飼料用米を給与した豚肉は、「いもこ豚」としてブランド化が図られている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
そらゆたか	約2.5ha	821kg/10a	255kg/10a(566kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻、息子)
- 後継者(息子)と今後を見据え付加価値を意識した生産を検討し、栽培講習会等に積極的に参加

【作付品目】

- 主食用米: ななつぼし 2.19ha
- 飼料用米: そらゆたか 2.53ha
- 秋小麦: きたほなみ 7.86ha

【取組のきっかけ】

- 農地集積に合わせ水稲作付面積の維持と収量性にウェイトを置いた生産に向け、平成27年産から飼料用米生産に取り組む。

【取組概要】

- 北海道の気候に適しており、多収性もある知事特認品種「そらゆたか」を選定。
- 施肥は、土壌診断に基づき、茎葉生育過程において3月にケイカル100kg/10aを散布し、また移植時に活着をよくするため、5月に腐食リン30 100kg/10aの散布を行っている。
- カメムシ防除剤を無人ヘリコプターで散布し、また、初中期一発除草剤を用いて防除回数を削減し、省力化・コスト削減を図っている。
- 調製した飼料用玄米をフレコン詰め出荷し、JA北いしかりの倉庫に集約させることで作業の効率化を行い、また、実需者に倉庫からの引き取りを行ってもらうことにより、流通コストを低減させている。
- 地域においては、労働力不足から転作により小麦の生産面積が拡大している中で、農地集積による経営規模拡大を図り、水稲作付面積を維持しながら収量性にウェイトを置いた生産に向け、JA北いしかりとの連携、栽培講習会への積極的な参加で生産技術の研鑽など先駆者として飼料用米に取り組んでいる。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
そらゆたか	約1.4ha	788kg/10a	249kg/10a(539kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収



【経営概況】

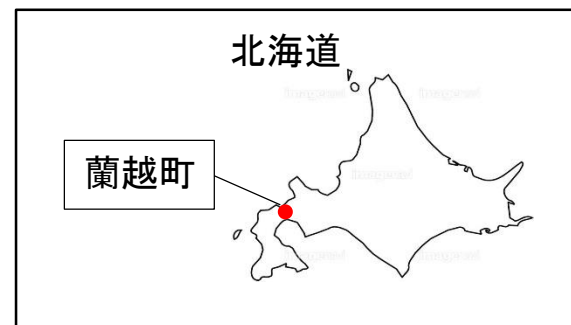
- 家族経営(本人、妻)
- 米を中心とした複合経営
- 慣行より多く施肥することで、高窒素による多収を実現

【作付品目】

- 主食用米:ゆめぴりか等 8.7ha
- 飼料用米:そらゆたか 1.4ha
- ななつぼし 0.6ha
- えん麦 0.8ha ○ トマト 0.9ha
- スイートコーン 0.3ha

【取組のきっかけ】

- 実需者と飼料用米生産者の耕畜連携(資源循環型サイクル)を基本とした取組に共感し、平成28年産から飼料用米生産に取り組む。



【取組概要】

- 北海道の気候に適しており、多収性もある知事特認品種「そらゆたか」を作付け。
- 病虫害防除は、残効性が長く効果が優れる薬剤を選択し、無人ヘリコプターによって散布することで、省力化を図っている。
- 堆肥の施用は、JAの黒松内堆肥センターを利用しており、地元の畜産農家と連携し、地場産有機資材の利用による資源リサイクルによる循環型農業を実践している。
- 定期的に土壌診断を実施し、土壌条件に見合った施肥設計を行うとともに、高窒素にする(慣行施肥量N6.5kg/10aに対し、N7.2kg/10a(+0.7kg 110.7%))ことで、多収を実現している。
- 個人の乾燥・調製機を利用。機械を定期的にメンテナンスしながら長期利用している。
- 大規格のフレコン(容量1,020kg)に入れて出荷することで紙袋と比べ労力もかからず、作業も行いやすい。また、フレコンはJA資材センターの早期とりまとめ時に注文することにより、早期予約の割引価格によりコスト低減を図っている。
- 水稲と作期分散できるハウス栽培トマト、路地栽培のスイートコーンを組み合わせ、経営内における通年労働を維持している。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	約4.1ha	706kg/10a	203kg/10a (503kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成20年3月法人設立
- スタッフ 7名(社員、パート)
- お米を中心とした農産物の生産・販売を手がけ、「人と人を繋ぐ農場経営」に取り組む

【作付品目】

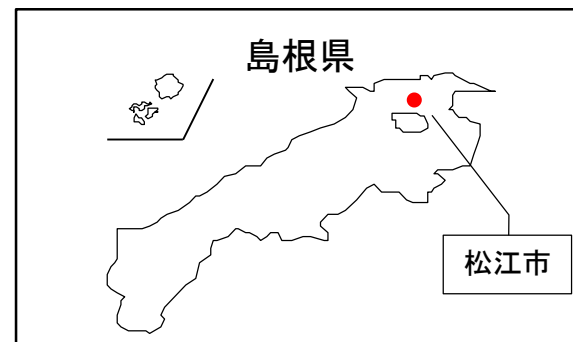
- 主食用米: コシヒカリ、きぬむすめ、つや姫等 69.2ha
- 飼料用米: ミズホチカラ 4.1ha
- 小麦 11.5ha

【取組のきっかけ】

- 県内畜産農家からの要望に応え、平成22年産から経営上のリスクヘッジの有効な選択肢として、直接取引により飼料用米生産を開始。
作業分散による効率的な農業機械の運用、立毛乾燥による刈取り時期の調整、もみ出荷により作業低減とコスト削減が図られ、経営上のメリットと考えている。

【取組概要】

- スマート農業技術の導入(ドローン、収量センサー付きコンバイン)による土壌改良、施肥設計等に取り組む、コスト削減・品質向上を図っている。
- 基本的には毎年同じほ場で、飼料用米の単作を行っているが、作付け前の冬場の雪や降水量等を勘案し、用水が早く確保できるほ場を選択する等の調整を行っている。
- 生産性向上のため、灌漑水の供給が早い地域を選択し栽培することにより、移植を早め、登熟期間を長く確保するなど多収品種の特性を十分に発揮できるよう管理を行っている。
- ミズホチカラは生育期間が長いため、基肥にできるだけ肥料効果が長い肥料を使用(田植え同時側条施肥)。また、幼穂形成期の速攻性のある追肥施用により、作業の省力化と収穫まで肥料を切らさない工夫をしている。
- 飼料用米生産は、作業分散による効率的な農業機械の運用ができること、刈取りを最終盤まで延ばし立毛乾燥による乾燥コストの削減ができること、もみ出荷による調整作業の手間とコスト削減が進められることがメリットと考えている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	約1.2ha	734kg/10a	235kg/10a(499kg/10a) [※]

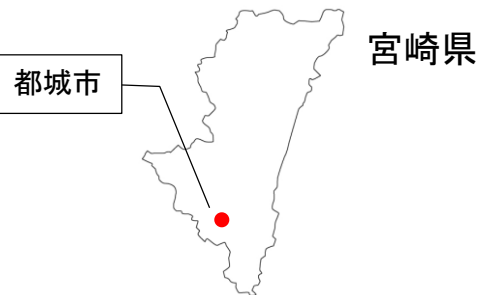
※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、妻)
- 養鶏(肉用鶏)、水稻、露地野菜の複合経営
- 生産技術の工夫によりコスト低減に努めるとともに、地域農業の発展にも貢献

【作付品目】

- 主食用米: ヒノヒカリ等 2.3ha
- 飼料用米: ミズホチカラ 1.2ha
- 飼料作物: えん麦など 5.1ha
- 里芋 0.3ha



【取組のきっかけ】

- 以前から自身が経営する養鶏に利用するため主食用品種による飼料用米生産を行っていたが、平成30年産から、多収品種「ミズホチカラ」を用いて、本格的に飼料用米の生産に取り組む。

【取組概要】

- 土壌改良及び窒素補填のために、田植え前に鶏ふん堆肥を2.0t/10a施用しており、田植え時の側条施肥と合わせて、地力の増進と、安定的な収量確保に努めている。
- 品質低下に十分留意しながら立毛乾燥を行い、籾水分を低下させることで乾燥コスト低減の取組を実施している。
- 経営農地のうち、ほとんどが借地で利用権設定しており、農地中間管理機構も活用し、農地の集積・団地化を進めている。
- 飼料用米の他にも、飼料作物を栽培しており、近隣の畜産農家に供給することで、地域の耕畜連携に取り組んでいる。また、地域のJA営農指導員や農業者等と飼料用米の肥培管理で意見交換を行うなど、品質向上・収量増加に向け、切磋琢磨している。さらに、新規に取り組む農業者へのアドバイスをを行い、飼料用米の収量増加につなげるなど地域全体の技術向上にも貢献している。